

「CONTACT CONTACT 1997年製作 153分」の見どころ

上映前

①●オープニングのすばらしさ・難解さ: 宇宙をバックグラウンドとする映画にふさわしく、映画は画面一杯に映された地球から始まる。…と思った瞬間、カメラは、宇宙に向けて発射されたロケットから撮影しているのかと思うように、急速に地球から離れていく。

まず月が地球に重なり、火星が現れ、小惑星群の中に突入し、木星の渦が見えてくる。背後の太陽は、どんどん小さくなる。そのビジュアルに目を奪われてると、耳には音楽のような音に混じり、ノイズのような男性の声(TV 音声)が飛び込んでくる。

「私はうそつきではない」ニクソン

「R.ケネディーが暗殺されました」

「ケネディー大統領暗殺を狙い」

「あなたは共産党員ですか？」マッカーシー

古い時代に地球から放たれた電波ほど、地球から遠い距離に漂っていることを示す。そして、意図的に抜き出され音声の内容が、政治的な事件に関係するものであったことも、スタートから47分で明らかになる最初の大きな驚き(この電波を宇宙で聴いていた知的生命体からの初めてのコンタクトは、ヒトラーのベルリン・オリンピック開催宣言の返送だった！)の伏線だったのだ。

やがてカメラは、土星を過ぎ、太陽系外に飛び出し、星雲の中に突入する。更に銀河系を離れ、銀河団を離れ、そして1,000億の銀河を含む宇宙全体を一望したその瞬間、宇宙の闇が少女の瞳の闇にとけ込む。⇒外の宇宙と内なる心の宇宙が最後に一致することの予表。その接点は、“夏の大三角形”、琴座のヴェガだった…(?)。ここまでで、わずか3分35秒、見事なオープニングだ。

②エリー、父親テッド姿のヴェガ星人、ジョス3人のセリフで、最も心に残ったものは？⇒この映画のテーマ。

③原作者カール・セイガンの好きな星座がどこかに。(ヒッチコックよろしく、星座のカメラ出演) 探して！⇒

●手のひらのクローズアップなど幾つかのシーンで円弧状に並んだ光点のパターンが繰り返し現れる。これはカール・セイガンのお気に入りの星座で、その形が電波望遠鏡を思わせるかんむり座の星の並びになっている。

上映後

エピソード

●名セリフ: 「広い宇宙がもったいない」。

エリーは、父親のテッド(デイヴィッド・モース)に宇宙人は居るのかな?と自分の考えをぶつける。テッド(モース)は「この広い宇宙に、人類だけしかいないとすれば、この広い宇宙がもったいない。」全く同じ言葉を、宗教学者のパーマー・ジョスも彼女に言う。

●アメリカ大統領が会見を行うシーンで、当時のクリントン大統領の実際の会見映像をデジタル加工したものを使用し、物議をかもした。

●リアリティーの追求のため、「メッセージ」に対する世界の反応を追うニュース発信源としてCNNが使われ、実際にCNNのリポーターが25人以上出演している。また、「ラリー・キング・ライブ」や「クロスファイア」といった番組も使われている。

●日本①: マシーン2号機の存在場所は、表示された地図上から、北海道の知床半島の付け根の南側であると分かる。実際に北海道でのロケの予定があり、事前にスタ

ップが北海道を訪問してロケ地を探していたが、予算不足で北海道ロケは実現しなかった。主演のジョディー・フォスターは日本でロケができなかったことを残念に思い、他の映画のプロモーションで来日した時の記者会見でも「北海道」という名前を発言している。

日本②：北海道上陸の際、日本文化を意識した船室が登場するが、洋画でよく目にする「不自然な日本」が描かれている。(床の間に鏡餅、木の引き戸、掛け軸、など)(初めて合格点が出たのは、「ラスト・サムライ」)

●オッカムのかみそり:

ある事柄を説明するためには、必要以上に多くを仮定するべきでないという法則。パーマーが神を信じていることを語ると、実証主義のエリーはそれをオッカムのかみそりを例に一笑に付す。パーマーは、愛する父親を幼くして失ったエリーに、父親を愛していた証拠はあるのかと問いかける。(⇒証拠はなくても事実は事実なのだ。)

この映画の魅力

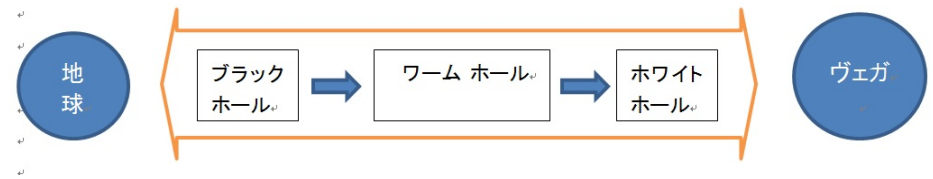
●地球外知的生命体と人類の接触を描いたカール・セイガンのベストセラーをロバート・ゼメキスが映画化した、当世はやりの空虚なSFX作品とは全く方向性を異にした骨太なSFドラマ。

①原作: カール・セイガン:

●小説家であり、NASAの宇宙探査計画や惑星探査計画にも数多く携わった、れっきとした天文学者。自作の小説が映画化されることを非常に喜び、全面的に協力していたが、1996年12月20日に62歳の若さで永眠。完成した映画を見られなかった。この映画の最後には「カールにささぐ」という献呈辞が表示されている。

●この映画の彼の最先端科学理論:

*ワームホール時空間移動の仮説(



*三次元(3D)ポッド設計図構造と、地球電波を利用したその返送便による伝達。

ヒラーによる1936年のベルリン・オリンピックの開会宣言は、初のテレビ映像電波として宇宙に発信され(これは事実)、26年かけて1972年にヴェガに到達。それに立体設計図を織り込んでヴェガから発信された電波は同じ26年をかけて1998年、地球に到達し、初めての地球外知的生命体からの「コンタクト」となる。

*逆相対性理論

●1980年、彼の企画した『コスモス』という、宇宙ものの科学番組シリーズは、全世界の人々を宇宙の虜にし、SFフリークと科学者の卵を大量生産した。

●彼は、科学のすばらしさを大衆に伝える伝道師であった。それ以上に、人類の小ささとすばらしさを同時に説く革命家(聴聞会のエリーはその化身)であった。実際彼は、反戦運動に何度も参加し、逮捕歴もある。また、核戦争の危険性を警告した『核の冬』の著者であり、この文字通り寒気をする言葉を全世界に広めることになった張本人でもある。

●彼は「証拠がなければ信じない」徹底した懐疑論者であったが(エリーはその化身)、一方で「証拠がなくても信じる(信じたい)」人々の心情に理解を示すことができる希有な人物でもあった。

●この映画の、懐疑論者セイガンが描いたキリスト教的要素(「神」という言葉こそ出てこないが、全編にわたって“創造者”の視点がかかいま見られる。)

*ヴェガに降り立った時の透明球体の障壁を苦も無く越えてエリーの前に立つ父親テッドに化身したヴェガ星人⇒鍵のかかった二階座敷を超えて弟子たちの前に立った復活のキリスト。

*科学の粋を究めた宇宙輸送網や、高度の文明を持ったヴェガ星人をさえ創り、やがて再臨する“全能者”の存在。

*神の視点に立った一級の人間診断。

*“創造者”の視点を持って初めて説得力を持つ、この映画の3ポイント・テーマ(後述)。

②ストーリー:

a.最先端科学理論の裏付け。

b. もしも地球外知的生命体とのコンタクトが可能になった時、人は、政治は、メディアはどう反応するのか。そんなシミュレーションを徹底的に行ったディティール。

③脚色: セイガンの長編を大胆に映画化。それでいて芯は曲げていない。

④撮影: 自在に動いて息をのむ宇宙の美しさをカメラに収め、ポッド発信時や、ワームホール脱出時など、時として信じられないような映像を見せる。

⑤監督: ロバート・ゼメキス

「バック・トゥー・ザ・フューチャー」他、娯楽映画の第一人者の本格的SFドラマ。

*「今回、私は自信を持ってSF(Science Fact)映画を作った。」(ゼメキス)

⑥俳優陣:

●《主演》ジョディー・フォスター

●ジョディーは、本作以前の20代に「告発の行方」(1988年、26歳)と「羊たちの沈黙」(1991年、29歳)で、2度にわたるアカデミー賞主演女優賞を獲得しており、「アカデミー賞の呪い」から逃れるとともに、子役から順調にキャリア・アップし大スターになった数少ない女優。(厳密に言えば、13歳でアカデミー賞の助演女優賞にノミネートされた

「タクシー・ドライバー」(1976年)が社会的な影響を与え、レーガン大統領暗殺未遂事件の要因となったことで、彼女がハリウッドと距離を置くことになったことが、「アカデミー賞の呪い」の1つかも。)

そうした中で、彼女自身の強い意志を持つ知的なイメージが最大限に生かされたのが、このエリー(エリナー・アロウェイ)の役だった。

●聴聞会での涙ながらに“神”体験を信仰告白する彼女の演技は秀逸。彼女が主演だったというだけで、この作品は何倍もの輝きを得ている。

●この作品で彼女が演じるエリナー(エリー)・アロウェイは、両親を幼い頃に亡くした(母親は娘の出産のとき合併症で、父親は9歳の時に心筋梗塞で)が、生前に父親の薫陶を受けて、アマチュア無線と天体観測が大好きな好奇心の旺盛な少女だった。

高校を飛び級で卒業し、MITに進学、ハーバード大学のオファーを断り、電波天文学者として地球外の知的生物の存在を追い求める、強靱な意志を持つ女性だ。

エリーの生年月日の設定は、1964年8月25日生まれであるのに対して、ジョディーは1962年11月19日生まれ。ジョディーも、ハーバード大学からの誘いを断って、イエール大学へ進学した経歴を持ち、エリーと重なるところがある。

●この作品は、「フォレスト・ガンプ」と比べると、興行面で成功したとは言えず、アカデミー賞からも無視された。ジョディーの演技も、ゴールデングローブ賞の主演女優賞のミネートにことどまったが、アカデミー賞受賞2作を上回る出来である。

●パーマー・ジョス: マシュー・マコヒエ(2014年度アカデミー主演男優賞「ダラス・バイヤーズクラブ」)

他のスタッフ・キャスト

S・R・ハデン: ジョン・ハート

デイヴィッド・ドラムリン: トム・スケリット

マイケル・キッツ: ジェームズ・ウッズ

テッド・アロウェイ: デイヴィッド・モース

少女時代のエリー: ジェナ・マローン

ケント・クラーク: ウィリアム・フィクナー

レイチェル・コンスタンティン: アンジェラ・バセット

⑦優れたテーマ:

*地球外の他者との「コンタクト」を通して、内なる自分自身を見つめ直す＝外宇宙と内宇宙の融和。(冒頭シーンが暗示するもの)

●SF映画の3つの流れ:

①地球外からの攻撃: 「宇宙戦争」「マーズ・アタック」「*インデペンデンス・デイ」「スター・ウォーズ」「エイリアン」

②地球滅亡の危機: 「アルマゲドン」

③地球外知的生命体との友好: 「*E.T.」「*未知との遭遇」「**2001年宇宙の旅」

「*コンタクト」

①*「インデペンデンス・デイ」ホラ話

③*「E.T.」おとぎ話

③*「未知との遭遇」パーティーのような社交的雰囲気。

③**「2001年宇宙の旅」あえて難解にすることで科学的詮索と批評を避けたか?

③*「コンタクト」: SF(Science Fact)を駆使した「証」の世界と、創造論に立った「信」の世界の見事な「コンタクト」、そして「融和」。

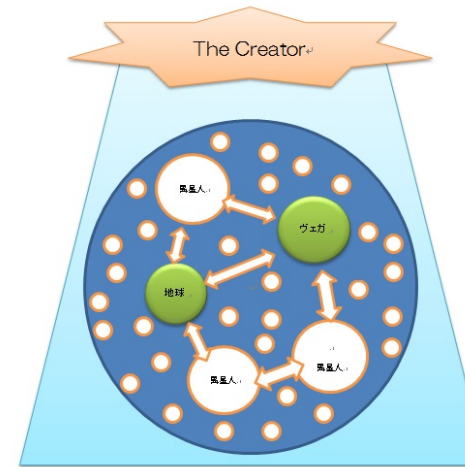
テーマ

●クイズの答え: as スリー・ポイント説教!

①テッド: 「この荒涼とした宇宙で、心の空虚さを満たすのは、互いの存在だけだ。」

②エリー: 「私たちは、より大きな存在に抱かれていて決して独りではないのです。」

③ジョス: 「科学と信仰の進む道は違うが、ゴールは1つ。真理の探求です。」



●この作品が感銘深いのは、主人公が懸命に目標に向かって突き進む姿なのだ。父母を幼くして失った孤独な少女が、神を信じることなく成長して宇宙科学者になり、地球外の存在を信じて、コンタクトを求め続ける姿。

彼女が宇宙へとコンタクトを求めるのは、科学者としての真理探究の欲求というより、孤独を癒や

してくれる存在への魂の探求だった。端的に言えば、彼女は、無意識のうちに、頭では否定していた神の存在を求めているのだ。

そんな彼女を、ヴェガ星人は、待っていた。彼女は、自分では全く気付かなかったが、待たれていた。被造物なる人間は誰も、創造者に待たれているのだ。そして、真摯に道を求める人は、必ず The Creator に出会う。

●エリーは、初めて説明も証明もできない出来事に会い、それまで見なければ信じなかったのに、生涯で初めて見ないで信じた。ダマスコ途上のパウロが復活の主に出会ったように、「見ないで信じる者は幸いだ」と主に諭されたトマスのように。なぜか? 彼女は、宇宙で、肉眼には決死見えない”神”(創造者)に出会ったからだ。

●アウグスティヌス「私は、あなたによって創られた。だから、あなたのもとに帰るまでは、決して安らぎを得ない。」(告白)。⇒被造物なる人は、創造者のもとに帰るとき、初めて心の空虚さを満たされ、永遠の魂の安らぎを得る。

★いやあ、「聖書で読み解く映画」って、いいですね。ではまたお会いしましょう。ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ!